

# イデックスオイルレポート ~For a week~

2022/7/8作成 (株)新出光

## 【概況】<米国景気後退~カスピ海パイプライン操業停止命令>

●1日、直近の下落の反動から安値拾いの買いや持ち高調整目的の買いが入りました。また西側諸国の制裁でロシアの産油量が落ち込む中、石油輸出国機構(OPEC)加盟国とロシアなど非加盟産油国で構成する「OPECプラス」が追加増産を見送り、需給逼迫に警戒感が広がっていることも相場を後押しし108.43ドルへ反発しました。

●4日、米独立記念日のためNY市場は休場。G7が検討しているロシア産石油の価格上限設定について、ロシアが報復措置として最大で石油生産を5MBD削減するシナリオも警戒され、供給懸念が意識され持ち直しをみせる可能性があります。

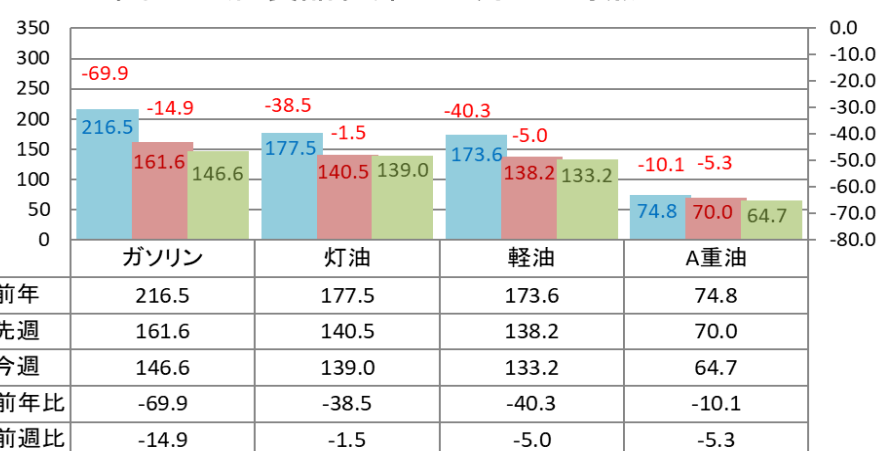
●5日、米金融当局がインフレ抑制を最優先し、積極的な利上げを継続する方針を示す中、景気後退への警戒感が強まっています。加えて、この日は低調なユーロ圏経済指標の発表を受けて成長鈍化懸念が再燃し世界的な景気先行き不透明感が台頭し、エネルギー需要の減退を招くとの連想からリスク回避の原油売りが膨らみ相場は99.5ドルへ下落しました。

●6日、各国の利上げに伴う景気減速への警戒感が台頭。エネルギー需要見通しにも懸念が強まり軟調な基調が続きました。また、対ユーロでドル高が進行しドル建てで取引される商品の割高感につながりました。また、中国で新型コロナウイルスの感染が再び拡大し各地で感染防止措置が強化されており、世界経済の先行きにも影響するとの見方からも売り材料となり相場は98.53ドルへ下落しました。

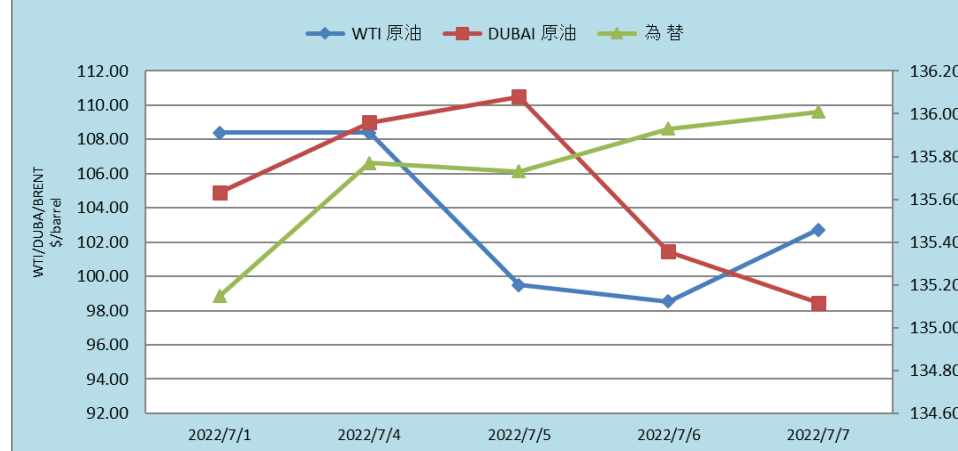
●7日、ロシアの裁判所は6日までに、カザフスタン最大の油田とロシアの黒海沿岸を結ぶ原油パイプラインを運営する「カスピ海パイプライン・コンソーシアム(CPC)」に対し、30日間の操業停止命令を出しました。同パイプラインは世界の原油輸送の約1%を担っており、実際に操業が止まれば需給が一段と逼迫するとの警戒感が出ています。また米政府が対立するイランへの制裁を強化した事もあり相場は102.73ドルへ反発しました。

7月8日 17:00現在 WTI原油 100.90ドル 為替 1ドル 137.06円

国内石油製品在庫 7月2日時点 単位万KL



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ 単位 円



	次回元売変動予測	
	7/14~	元売変動予測
ガソリン	→	-2.3~-2.8
灯油	→	-2.3~-2.8
軽油	→	-2.3~-2.8
A重油	→	-2.3~-2.8
LSA	→	-2.3~-2.8

※原油コスト「-6.5円」  
 ※激変緩和補助金「-36.6円~-37.1円」  
 ※現時点での予測です。

## 【製品卸価格】<7月9日以降元売月間玉の販売攻勢強まり市況も下落傾向>

《今週》今週の元売り仕切り改定は3社ともに原油コスト「+2.0円」、補助金「-40.8円」、都合「-0.4円」の値下げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの4日時点の小売価格平均は173.6円となっております。

今週のマーケットの主演は、元売週間玉を持つ業者でした。市況連動玉及び元売り月間玉を持つ業者は、7月のコストがまだ見えないため慎重な販売姿勢でした。

《7月9日以降》次回の元売り改定は、原油コスト「-6.5円」の値下げ改定予測で、激変緩和補助金は「-36.6~-37.1円」の見込みで、都合「-2.3~-2.8円」の値下げ改定の予測となっています。

9日以降は元売り月間玉、市況連動玉、元売週間玉の各業者入り乱れての販売合戦になると思われます。毎日に市況が下がり最終的には、元売月間平均玉を持つ業者が市場を席巻するものと思われます。来週14日からは、原油コストの下げも見えてきており7月のコストもあらかた見えてきます。一方、補助金は減る見込みのため元売月間平均玉を持つ業者は、今週が一番の販売チャンスと見て販売を強化してくるものと思われます。14日からの下げが見えているためオーダーの先送り傾向があり12、13日の取引は閑散とするものと思われます。14日以降オーダーが集中しローリー繰りも混雑するものと思われます。

## 【次世代エネルギー】<IHI、世界初・液体アンモニア100%燃焼によるCO2フリー発電を達成>

株式会社IHIは、2,000kW級ガスタービンで液体アンモニアのみを燃料とするCO2フリー発電を実現。燃焼時に発生する温室効果ガスを99%以上削減することに成功したことを発表されました。アンモニア(NH3)は、炭素(C)を含まないため、燃焼時にCO2を排出しない燃料として、既存発電設備で利用できる。IHIが取り組む、ガスタービンの燃焼器内に液体アンモニアを直接噴霧する燃焼方式は、貯蔵タンクからガスタービンまでの供給システムの簡素化や制御性向上など、社会実装に向けた利点があるとの事です。現在までの課題が70%を超える高いアンモニア混焼率での運転時、CO2の約300倍の温室効果を持つ温室効果ガス的一种・亜酸化窒素(N2O)が発生し、CO2排出量を削減できても温室効果ガス削減にはつながっていなかった点で、今回新たに開発した燃焼器を搭載して試験を実施した結果、70~100%の高いアンモニア混焼率でも温室効果ガス削減率99%以上を達成し、液体アンモニアのみの燃焼で2,000kWの発電ができることを実証されたとの事です。2025年の液体アンモニア100%燃焼ガスタービン実用化に向けた取り組みを進めていくとの事です。

[出典]

① <https://www.drone.jp/news/2022061613322053668.html>